

歳時 世相篇

⑥ 【独立記念日】

ビバ！メヒコ、 ビバ！ユカタン

鈴木紀（すずきもと）

本館先端人類科学研究部

九月の声を聞くと、メキシコ人はメキシコ人であることを意識せざるをえない。

九月一日は大統領教書発表の日。その年のメキシコの情勢と今後の展望を大統領自身が国民に語りかける。一日は少年義勇兵の日。一八四七年のこの日、首都に進軍したアメリカ軍に対して五人の少年兵が身を挺して祖国を守ったといわれる。そして一五日の夜はグリト（叫び）。一八〇年にはじまった独立戦争の闘いの声をまねて、人びとは各地の広場でビバ・メヒコ（メキシコ万歳）と叫ぶ。その興奮は翌一六日の独立記念日へと続き、各地でパレードがおこなわれる。メキシコの九月はナシヨナリズム高揚の月である。

点とするメキシコ国家によって維持されていることを再学習するのだろう。

一六日のパレードも人びとにメキシコ国家の存在を印象づける。行進するのはおもに公立学校の生徒達と公務員である。後者には病院、保健所、消防署、警察などの職員や、軍人が含まれる。パレードを見れば、国家とは決して抽象概念ではなく、公共サービスを提供する具体的な組織や団体の集合であることに気づかされる。そして人びとは国家を支え、国家も人びとを支えていることが実感される。

ユカタンのたくらみ

だがこうした考察はやはり表面的といわざるをえない。注意深く情報を集めると、ユカタンならではのナシヨナリズムの裏舞台が見えてくる。

例えばユカタンの旗。五つ星に赤白のストライプはどこかアメリカ合衆国の旗に似ている。その起源は、一八四一年、中央集権を強化しようとしたメキシコ政府に対して、連邦制を求める勢力がメリダ市庁舎の上に掲げた旗だといわれている。地元紙によれば、二〇〇〇年ごろにメリダ市民のあいだでユカタン旗のブームがあったという。市民は旗のシールをマイカーに貼り、独立記念日の前にはこの旗が方々で売られていた。ブームの火付け役の一人となった男性は、現在も、日曜こ

ビバ・メヒコの興奮

二〇〇五年と二〇〇六年、わたしはメキシコ南東部、ユカタン州の州都メリダ市で独立記念日を過ごした。ユカタンは、メキシコのなかでも、郷土愛の強い地方として知られている。その理由は独自の歴史過程にある。首都のメキシコ市がアステカの都、テノチティトランの上に築かれたのに対し、メリダ市はマヤ集落、ホツを土台にしている。植民地時代、ユカタンは広大な新スペイン副王領の辺境に留まった。そして独立戦争に関与することなく、無血でスペインからの独立を達成した。そんなユカタンでメキシコ

のナシヨナリズムはどのように表現されているのか。興味津々、わたしはメリダの街を歩いた。

第一印象は意外なものだった。他の地方と同様、ユカタンでもメキシコのナシヨナリズムが強烈に演出されていたのだ。一五日の夜、午後八時ごろから中央広場に市民が集まりはじめる。音楽や踊り、さまざまなパフォーマンスが人びとを魅しませる。午後一時、政府庁舎のバルコニーに州知事があらわれる。鐘を鳴らし国旗をふる。独立戦争の英雄を称え、最後にビバ・メヒコと叫ぶ。群衆も呼応して大声でビバと返す。すぐさま火花が上がり、紙ぶきが舞う。その場に居合



メリダ市の独立記念パレード。学生たちが市民の前を行進する（2006年）

とに公園でユカタン旗の資料やシール、バッジを売っている。近年の文化のグローバル化に対して、自分たちの価値を守りたいというのがその動機だ。彼にとつて、外来文化の流入で脅威にさらされているのは、メキシコではなくユカタンの文化である点が興味深い。

ブームが去った理由も注目し値する。

選挙制度をめぐってメキシコ政府と対立したユカタン州知事が、ユカタン旗をぶつて抗議したという。これに対し野党政治家は、知事の個人的な野望のために、由緒ある旗が汚されたと非難した。どうやらユカタン旗は、地域主権の象徴というよりも、その混乱の象徴となつていっ

たようである。

わせたわたしは、メリダ市民のナシヨナリズムの奔流に巻き込まれた。

グリトは独立戦争をテーマにした公的な演劇といえるだろう。しかもそれはふたつの意味で再上演だ。ひとつは、一八〇年にイダルゴ神父がスペインの圧制に対してあげた抗議の声を再現するという意味で。もうひとつは、メキシコ市のソカロ（中央広場）で大統領がおこなうグリトを、同時進行でメリダでも再現するという意味で。メキシコ万歳と叫ぶユカタン州知事の後ろに、メキシコ大統領と、独立戦争の立役者の姿が重なる。こうして人びとは、イダルゴ神父によってもたらされた自由が、現在も大統領を頂

もう一例を示そう。それはパーティーのメニューである。メリダ市のホテルやレストランの多くは、独立記念のデイナーを企画する。普通は典型的なメキシコ料理を並べるものだが、なかにはユカタン料理をしるべせる場合もある。例えば二〇〇五年のホテル・コンキスタドールのメニューでは、メキシコ各地の地名をつけた一八種の料理のうち、二種がユカタンにちなむものだった。一方はよく知られた牛肉の郷土料理だが、他方はシビルチャルトウン風サラダという創作料理である。チャヤという地元野菜を使ったサラダに、メリダ市近郊のマヤ遺跡の名前を冠している。こうしたメニューは、メキシコ料理とは虚構の産物であり、実際にはさまざまな郷土料理の寄せ集めであると主張しているように思える。ユカタンにおける祖国愛と郷土愛のあり方の隠喩（いんぎょ）と考えることもできるだろう。

グローバリズム、ナシヨナリズム、郷土愛。これら三者は相互に影響しながらわたしたちの生き方を揺さぶる。毎年九月、メキシコでは独立記念日を中心に三者関係が更新、再編されていく。まして二〇一〇年は独立戦争開始二〇〇周年にあたり、さまざまなイベントが企画されていると聞く。当分わたしは九月のメキシコから目を離すことができそうもない。